

< 検査等の活用 >

学習や行動面での困難が見られる場合、対応を考える場合の情報のひとつとして、発達検査を用いることがあります。個々の特性をとらえ、対応の手だてを考えるためには、発達の視点と個人の認知特性を見ていく必要があります。LD、ADHDのための検査ではありませんが、京都では新版K式発達検査、WISC-III、K-ABC等がよく利用されています。検査の数値そのものよりも、そこから読みとれる個人内差や特性に応じた手だてを導き出すことが大切です。

検査は、誰でもすぐにできるものではありませんが、保護者の同意が得られたらすぐに、経験を積んだ専門機関を利用し、その検査者と共に手だてを考えていきましょう。

学校の教育場面で行われるテスト、学力検査のデータとの比較も大事な情報となります。特にLDやADHD、高機能自閉症の子どもたちは、知的には高い力を持ちながら、学校の勉強やテストでは力を発揮できないままにいることが多いのです。持てる力を出すにはどのような工夫をしたらいいか。そこに必要な支援が見えてきます。

たとえば、言語力はあまり良くないけれども、視覚認知の力が非常に高い場合には、板書を簡潔に、カラーを利用して見やすくしたり、図や絵を多様することで、理解しやすくなります。



認知処理過程尺度 (7つのサブテスト)	観点	評定法 満点/欠点/項目数/評定範囲	7歳未満 制限	5歳未満 (3歳未満)	その他の特徴
1. 聴法の欠					
2. 聞きがし					
3. 手の動作					
4. 形の結合					
5. 数					
6. 連続の構成					
7. 図の配列					
8. 視覚記憶					
9. 図をさがし					

言語能力 (2つのサブテスト)	観点	標準得点と評定範囲 — 40点/100点	7歳未満 制限	5歳未満 (3歳未満)	その他の特徴
10. 表現ごい					
11. 数					
12. 文字ごい					
13. 二文字の読み					
14. 文の理解					

総合能力 (7つのサブテスト)	観点	標準得点と評定範囲 — 40点/100点	7歳未満 制限	その他の特徴
認知処理尺度				
言語処理尺度				
認知処理過程尺度				
聴覚尺度				
視覚処理尺度				

総合知能の比較 — 100点満点 (10歳未満)	認知処理 (満点: 50, 5%, 1%)	言語処理 (満点: 50, 5%, 1%)	両者の平均 (満点: 50, 5%, 1%)	両者の差 (満点: 50, 5%, 1%)

センターでは、通常学級の担任のために検査結果の読みとり方の講座を、検査者のために実技実習講座を行っています。